

今回の特別研究期間における研究の目的は、1942~3年ナチ政権に対する抵抗を試みたグループ「白バラ」の背景を明確にすることである。具体的には「白バラ」メンバーに対する「内的亡命」者の影響を明らかにしたいと考えていた。

「内的亡命」者とは、ナチ時代亡命することなくドイツ国内に止まったが、ナチ政権に加担することもなかった知識人たちに冠せられた呼び名である。第二次世界大戦後、「内的亡命」者とドイツ国外に亡命していた知識人の間で論争が起こった。「内的亡命」者側は、同胞が厳しい戦いで悲惨な生活を強いられていたのを、安全な外国から高見の見物をしていただけで亡命者を非難し、亡命者の側は、ナチ政権を自力で倒すこともできず、結局ナチに協力したと「内的亡命」者を責めた。

1950~60年代のドイツ連邦共和国では、どちらかという「内的亡命」者の主張が一般社会の世論に一致するものとして認められていたが、70年代以降、徐々に「ナチ」政権を可能にしたドイツ国民の責任を問う論調が強くなり、同時に「内的亡命」者に関しても、ナチ時代権力側と協力していたのではないか、という疑問が提出されることが多くなった。現在ではむしろ「内的亡命」者は常に「ナチ」との協力が疑わしい存在として扱われるようになっている。

ナチ政権成立の時点で亡命を選択せず、敢えてドイツに残って言論活動を継続しようとした知識人たちは、作家、評論家として仕事を続けたければ、当局に「著作家」として登録してもらう必要があった。厳密に言えば、ナチ政権と全く妥協せずに「物書き」を続けることは不可能だったのである。その限りで、「内的亡命」者がナチと協力、ないし少なくとも妥協していた、という否定的な評価は間違いではない。

けれども、必ずしも諸手を挙げてナチ政権を歓迎した訳ではない、少なからぬドイツ人にとって、慎重な言葉使いで、真綿にくるんだような迂遠な議論であっても、全体主義の潮流とは異なるものの考え方をする人の文章を目にすることは、救いであり、励ましであったと考えられる。

「白バラ」の学生たちは十代前半からこのような社会で成長した。彼らの人格形成に「内的亡命」者の文章が影響を与えたであろうことは、十分に考えられる。具体的にどのような作家、思想家が読まれ、どのような影響を与えたのか、資料に拠って明らかにしたいと考えた。

2008年4月から9月まで滞在したベルリン抵抗記念館には、「白バラ」メンバーの裁判記録、秘密警察の尋問調書が纏められている。これらの資料のオリ

ジナルは、連邦文書館に収集・管理されているが、抵抗記念館にはミュンヘン、ハンブルク双方の「白バラ」に関する資料が集められており、コピーではあるが、「白バラ」に関するナチ当局の資料を最も集中的に効率よく閲覧できる。また、メンバーの遺族、関係者から資料の提供を受け、問い合わせに対応してきた実績もあり、非公開の私的な資料の閲覧も特別に許可してもらった。

多くの文書を閲覧する中で、「白バラ」のメンバーについて未知の側面を発見する場合もあり、彼らの活動に対する理解に厚みを加えることはできた。しかし、残念ながら、警察・司法の書類には、メンバーの読書傾向に関する記述は殆どなく、「内的亡命」作家の「白バラ」メンバーに対する影響について、新たな知見を得ることはできなかった。

2008年10月から2009年3月まで滞在したミュンヘンの現代史研究所には、インゲ・アイヒャー＝ショル遺贈資料がある。これは、ミュンヘンの「白バラ」グループで中心的な役割を果たしたハンスおよびその妹ソフィー・ショルの長姉、インゲ・アイヒャー＝ショルが生前収集・管理していた資料を整理、マイクロフィルム化し、カタログを付して研究用に公開しているものである。内容は多岐にわたるが、ハンスおよびソフィーの書簡、日記、手稿、友人たちと作成・回覧した文集『風防燈火』が含まれている。

日記、手稿、私信には、当然彼らの読書傾向も記されているはずである。二人の書簡・手稿の一部は、既に公刊されており、その部分から推測しても、残された手紙や日記から、彼らがどのような作家を評価していたかを伺い得ると考えられる。

残念ながら、今回の滞在中には、ハンス・ショルの非常に初期の手稿のごく一部を除いて、ショル兄妹自身の書き残したものを読むには至らなかった。これは、一つには、まず初めに長姉インゲ・アイヒャー＝ショルの書簡を読み、ショル家全体の雰囲気を知ろうと考え、それを実行したからである。更に、技術的な問題として、手書きの文字の解読に想像以上の困難があり、非常に多くの時間を要したという事情もある。

当初想像していたよりはるかに膨大な資料と、長い時間をかけて取り組まなければ、具体的な研究成果をまとめることは困難であることが明らかになった、というのが、今回の特別研究期間における研究「成果」ということになる。少々情ない話ではあるが、これ以降も、学期間の休みを利用して、ミュンヘンの現代史研究所に通い、資料を読む作業を続行するつもりである。